

## ◆ドビュッシー／牧神の午後への前奏曲

地中海の夏の昼下がり、目覚めた牧神の幻想。二人のニンフを抱き留めようとした、あれは夢か現実か。牧神の情熱、高まる思いは、やがて真昼の静寂に打ち負かされ、再びまどろみの中に落ちていく…

象徴主義の詩人ステファヌ・マラルメ『牧神（半獣神）の午後』に着想を受け、1894年に完成、初演されたこの作品は、当初、前奏曲、間奏曲、敷衍曲の3曲構成で構想されたものの、前奏曲の完成度の高さゆえ後2曲が作られることはなかったとか。

1889年のパリ万国博で東洋の音楽に触れたドビュッシーが、従来の旋律・和声の概念を打破し、独特の感覚による新境地を切り開いていく。「牧神」は（俗に印象主義といわれる）彼の音楽の方向性を決定付けた作品といえるのではないか。

フルート奏者にとってこの作品は、フルートに始まりフルートに終わる、そしてフルート音楽の新たな可能性を開き、フランス近代の多くのレパートリーの先駆けとなった、特別な曲。冒頭の無伴奏フルートによる蠱惑的な主題に、いかに多くのフルーティストが惹きつけられ、かつ悩まされてきたことか…

フルートのCis（ド#）は通常使用する全てのキーを開放した不安定な音。これを起点に、半音階的に下降、上昇し、一瞬ホ長調を暗示しつつも方向の定まらない主題の、曖昧模糊とした夢うつつの浮遊感が、マラルメの詩のけだるい雰囲気を出している。この主題は何度も繰り返しながら変容し、そのたびに異なる和声付けがされ、曲想の推移とともに美しい色彩変化を見せる。

全音音階（ドレミファ#ソ#ラ#ドのようにオクターブを6全音で分割する音階）によるエキゾチックな経過句なども挟みつつ、音楽は高揚し、また沈潜する。変ニ長調の情感豊かな旋律が最初は管楽器、次いで弦楽器により奏でられ、リズムと和声の交錯により目まがいするほどの官能的な響きが醸し出される中、曲の頂点を形成する。

長く引き延ばされた冒頭主題に軽妙な運動が続き、やがてアンティークシンバルの清浄な振動とともに、曲は次第に静まっていく。主題はホ長調の響きに融解し、フルートの響きが、余韻を残す。

(Fl. T.T.)

## ◆モーツァルト／交響曲第35番ニ長調「ハフナー」

——この新しい<ハフナー・シンフォニー>には、まったくびっくりさせられました。これについては、一言もいふべき言葉がありません。これはきっと素晴らしい効果をあげるにちがいありません（1783年2月15日付、モーツァルトが父レーオポルトに宛てた手紙）

まさに「自画自賛」。いったいモーツァルトは自作の何に「びっくりさせられ」たのだろうか。

ときは1782年7月、モーツァルト26歳。ウィーンに移住して約1年が経ち、ようやく生活が軌道に乗りはじめたモーツァルトのもとに、父レーオポルトから作曲の依頼が入った。彼の親しい友人、富豪ハフナー家の子息の爵位授与式のために、セレナードを書くようにとのこと。

しかし、その頃、モーツァルトは公私ともに超多忙であった。オペラ「後宮からの誘拐」を管楽器用に編曲する作業に追われていたし、恋人コンスタンツェとの結婚の話が進み、7月23日に引越、8月4日には挙式、というスケジュールを予定していたのである。

そして、モーツァルトには、もう一つこなさなくてはいけないことがあった。それは父親から結婚の「許可」を得ることである。

半年前の1781年12月、モーツァルトは、コンスタンツェと恋仲であり結婚するつもりであることを、父親に宣言した。対する父親の返事はなく、焦ったモーツァルトは半年のうちに何度も結婚の許しを請う手紙を出している。この多忙なおりに作曲を引き受けた背景には、これで父親との関係の改善をはかり、あわよくば結婚の許可も頂きたい、という期待があったのかもしれない。

7月20日に作曲を引き受けたモーツァルトは、忙しい合間をぬって作曲に励んだのだろう。7月27日には、「ニ長調で書きました。お父さんの好きな調性ですから」という言葉とともに、アレグロ（第1楽章）のみを送っている。それから、終楽章、メヌエット、アンダンテ、行進曲と、順次送っていき、8月7日に完結。結果、このセレナードはわずか2週間強で完成した。

その翌年1783年1月、春に開催される演奏会のために交響曲が必要となったモーツァルトは、ハフナー家のために作曲した先のセレナードを返送してほしいと、父親に依頼した。冒頭に揚げたのは、その楽譜の返送に対するお礼の手紙の一節である。多忙ななか細切れに作った曲の思いがけない完成度には、彼自身も驚いたのだろう。行進曲を削り、フルートとクラリネットを両端楽章に加える程度で、ほとんど改変せず全4楽章の交響曲として完成させた。これが交響曲第35番「ハフナー」である。全曲を通じてどこにも暗い雰囲気のない、華やかで明るい祝祭的な雰囲気の交響曲である。

### 第1楽章 Allegro con spirito

全楽器の「レ」のユニゾンで始まり、すぐさま大きく跳躍する。鋭い符点、一瞬の休止、行進曲的なリズム、カノン風の展開、どの要素をとっても生き生きとしたエネルギーにあふれ、祝典の開始をつげる曲にふさわしい。

### 第2楽章 Andante

ゆっくり散歩しているような、穏やかで温かい雰囲気の楽章。展開部の和声の色合いが静かに変化していくところは、宗教的な美しさをたたえている。

### 第3楽章 Menuetto

力強い分散和音の上昇に始まる明るいメヌエットに、ヴァイオリン・オーボエ・ファゴットが唱和するシンプルなトリオが挟まれる。

#### 第4楽章 Presto

モーツァルト自身「できるかぎり速く演奏されなければなりません」と書いているように、無窮動な疾走感が魅力的。戸を叩くようなリズムが随所に出現し、力強いコーダで締めくくられる。

(Vn. S.H.)

#### ◆フランク／交響曲ニ短調

19世紀後半の大作作曲家の一人であり、フランス近代音楽の父ともいわれるフランク（1822-1890）。古くから司教領の首都として栄えたベルギーのリージュで生まれ育ちパリ音楽院で学んだ後は、フランスに永住し教会オルガニストとして生涯を過ごした。オルガニストとの活動と並行して地道な作曲活動にも励んでいたフランクは、1872年よりパリ音楽院の教授に就任してオルガンのほか作曲の指導も行い、ダンディ、ショーソン、デュパルク、ピエルネ、ルクーといった多くの優れた作曲家を輩出している（彼らは「フランク派」と呼ばれ、後のフランス音楽界を盛り上げていく）。また、フランク自身は作曲家としては遅咲きであり、60歳を過ぎてからピアノ五重奏曲、ヴァイオリン・ソナタ、弦楽四重奏曲、交響曲ニ短調といった独自の作風を確立した傑作を生み出した。

交響曲ニ短調は、現存する唯一のフランクの交響曲であり、晩年の1886年より1888年にかけて作曲されたものである。初演は1889年にパリ音楽院管弦楽団によって行われ、当日のプログラムにはモーツァルトの歌劇「イドメネオ」も含まれていた。発表当時、この曲に対する評価は賛否両論であったが、若き日のドビュッシーはこの交響曲に対する賛辞を述べた、といわれている。

この曲は、多くの交響曲と異なり三つの楽章からなるが、第2楽章は緩徐楽章とスケルツォ楽章を一緒にしたものにとらえられるため、4楽章からなる交響曲と構成が大きく異なるわけではない。全体としては、同じ共通の主題を各楽章にちりばめて全曲を統一する「循環形式」を用いており、フランクの宗教的で瞑想的な雰囲気醸成している。また、それまでほとんど交響曲では用いられなかったイングリッシュ・ホルンやバス・クラリネットを用いつつも、あくまでフランクらしいオルガン風の響きを実現している。

#### 第1楽章 Lento – Allegro non troppo

遅く暗い序奏は、ヴィオラとチェロ、コントラバスによる神秘的な「祈願の動機」で静かに始まる。この動機は、この交響曲で最も重要なものであり、全楽章を通して形を変えながら登場する。弦楽器のトレモロと動機の繰り返しによって序奏は熱を帯び、エネルギー溢れる *Allegro non troppo* へ到達する。しかしこれはそのまま続かず、調を変えて序奏へ回帰し、二度目の *Allegro non troppo* へと進む。力強い「祈願の動機」による第1主題が終わると、おだやかな音階風の弦のかけ合いによる第2主題となり、巧みに転調しながら情熱的で喜びに満ちた「信仰の動機」を導き出す。この「信仰の動機」と「祈願の動機」はさまざまな形で展開し、やがて低弦と金管楽器によって冒頭の序奏がカノン風に演奏され、重厚で荘厳な響きを形作る。これに *Allegro non troppo* の再現が続き、「祈願の動機」によって楽章が締めくくられる。

#### 第2楽章 Allegretto

最初は緩徐楽章的な部分であり、弦楽器とハープのピッツィカートに導かれてイングリッシュ・ホルンが感傷的で哀愁を帯びたメロディーを奏でる。メロディーはホルンや木管楽器も加えていくことによって音色に深みを増していく。やがてヴァイオリンが「信仰の動機」を基にした物悲しくも美しいメロディーを歌った後、冒頭のメロディーが再び現れ、緩徐楽章的な部分が終わる。次のスケルツォ的な部分は、何かざわざわと蠢くようなヴァイオリンのトレモロに始まり、クラリネットの夢想的なトリオ風のメロディーへとつながる。スケルツォの結びには緩徐楽章も同時に再現され、両者が絡み合いながら燃え上がった余韻のうちに楽章が終わる。

#### 第3楽章 Allegro non troppo

第1、第2楽章の暗くメランコリックな印象と対照的で、明るく伸びやかなチェロとファゴットのメロディーが流れる。これがこの楽章の第1主題となり、全合奏で華やかに演奏される。続いて金管楽器から始まる柔らかく美しいコラール風なメロディーが第2主題として現れるが、この明るい雰囲気はやがて再び陰鬱な雰囲気にとって代わられる。イングリッシュ・ホルンのメロディーを呼び戻して以降、これまでに登場した全ての動機やメロディーが姿を変えて複雑に重なりあい、劇的な盛り上がりを見せていく。最後は、高らかに第1主題が響き渡り、輝かしく幕を下ろす。

(Cl. grenadilla)